

歴史の中の女たち <第 25 回>

## ミラバル姉妹－独裁者に抵抗した女性たち

伊藤 滋子



1960 年 11 月 25 日暗殺されたミラバル姉妹  
(<http://www.historiapatriadominicana.org/hermanasmirabal.htm>)

20 世紀半ば、ドミニカ共和国には 31 年間 (1930－1961) にわたってラファエル・トルヒーヨという独裁者が君臨した。彼は反共産主義という名目のもとにあらゆる反対勢力を徹底して弾圧し、その間に国内外で殺された人の数は 3 万人に達し、多くの人が暴行や拷問、誘拐などの迫害をうけ、あるいは財産を接収されたり亡命を強いられた。基幹産業はすべて国有化され、脅しや価格操作、不正な資本投入などで国家経済までもが私物化された。ラテンアメリカの歴史に独裁者はこと欠かないが、その残虐さ、期間の長さ、個人崇拜の徹底ぶりは他に類を見ず、二人のノーベル賞作家、ガルシア・マルケス (『族長の秋』) とバルガス・リョサ (『チボの饗宴』) がこの特異な時代をテーマにした小説を書いている。そして今回の主人公、ミラバル三姉妹もこのトルヒーヨの犠牲者であった。

姉妹が生まれたのは北西部にあるサンティアゴ地方のサルセド近郊のオホ・デ・アグアである。

闊達で人付き合いがよく、商才に長けた父は細々と始めた商売を大きく発展させ、母はまじめで、困った人を助けることを義務だと考えているような人で、パトリア(1924 年生れ)、デデ(1925)、ミネルバ(1926)、マリア・テレサ(1935)の 4 人の娘を厳しく躾けた。家にはいつも祖父母やおじ、おばたちが出入りし、姉妹は大家族の中で愛情いっぱいに育つ。裕福だった父親は娘たちを飛行機で首都へ、あるいはバスで海に連れて行ったりして、さまざまな体験をさせた。彼女たちは村の学校で初等教育を受けたあと、母の意向でラ・ベガにあるフランシスコ会の尼僧が運営する寮付きの女学校に入れられた。尼僧たちはほとんどがスペイン人で、生徒はドミニカ全土から集まった上層の娘たちばかりである。しかし学友たちの中にはさまざまな人間模様がかった。国内隋一の金持の娘がいたが、後に彼女の父親は亡命し、反トルヒーヨ活動に全財産と自身の命を捧げた。ミネルバの隣のベッドにはいつも泣いてばかりいる娘がいて、父が彼女の面前で殺されたという。トルヒーヨは殺した者の娘に奨学金を与えていたが、彼女もその一人だった。その学友に同情したことが、ミネルバがこの独裁者を憎悪する始まりだった。美しく頭が良く、快活だったミネルバは成長するに従ってますます反トルヒーヨに傾いていくのだが、学友の中にはのちにトルヒーヨの愛人となって豪壮な屋敷を建ててもらった生徒もいた。

ハイチ人虐殺事件 (1937) が起きたのは彼女たちが寮生活を送っていた頃のことである。もと

もと国境もあいまいで、トルヒーヨは1935年にハイチとの間で国境を取りきめたが、相変わらずハイチ人は自由に国境を行き来してドミニカ国内で働いていた。トルヒーヨはこれを主権の侵害だとして、砂糖きび工場でハイチ人労働者のストライキが起こったのを機に、全土でハイチ人狩りをおこない、1万8千人が虐殺された。ミラバル家にいたハイチ人の女中はかくまわれて無事だったが、姉妹が親しんでいた近所のハイチ人は連れて行かれたきり戻ってこなかった。

個人崇拜が徹底し、首都サント・ドミンゴがシウダー・トルヒーヨという名に変わったのもこの頃のことである。

姉妹の父親はもともと女に教育は必要ないと考えていたので、パトリアが高校を卒業する前に家に連れ戻して大きくなった商売を手伝わせようとした。だが彼女は恋人ができて16才で結婚してしまったので、次女のデデを退学させて店の経理を任せた。父がミネルバを退学させたのは別の動機からで、彼女が過激な政治思想に傾いていくことに危惧をおぼえ、大学進学を諦めさせようとしたからだった。そしてご機嫌を取るために車を買って与え、彼女はその地方で乗用車を運転する最初の女性となった。父はこれで進学を諦めさせることができたと思ったが、後にその考えは甘かったことが分かる。彼女の友人はすべて反政府主義者ばかりで、彼女もそれを隠そうとはしない。

一家に災難が降りかかってきたのは1949年、ミネルバが22才の時だった。トルヒーヨが自分の生地サンクリストバルで開くパーティーへの招待状が届いたのだ。彼の招待は誰も断ることができない。デデも既に結婚しており、両親と4人の娘、それに上の二人の夫の計8人は会場に向かう。ミネルバを執拗にダンスに誘ったのはトルヒーヨの『女性調達係』を勤めていると言われる男だった。彼女はとうとう断り切れずに応じたが、踊り始めると途中で彼女はトルヒーヨに渡され、何曲

と一緒に踊った。家族は固唾をのんで彼女を眼で追った。ミネルバは席に戻るや、「何も飲まなかったから安心して」と告げた。トルヒーヨは目をつけた女性に薬を飲ませて意識を失わせると言われていたからだ。あとでミネルバが語るにはトルヒーヨとの間に次のような会話があったという。

「恋人はいるのか」「いいえ」、「おまえは私の政治が気にいらぬのか、それとも関心がないのか」「好きではありません」、「もしおまえを征服するために人を送ったらどうする?」「もし私がその人を征服したらどうなさいます?」。

直後に大雨が降りだし、会場は野外だったので大混乱となり、それに乗じて一家は早々にそこを抜け出して帰途についた。トルヒーヨは一家がいなくなったことに気付いて激怒し、側近にあたりちらしたという。2日後、その地方の上院議員が家にきて、パーティーを抜け出したことをトルヒーヨに謝る電報を打てと命じた。父はすぐそれに従ったが、そのあと彼とミネルバは首都に連行され尋問を受けた。母もミネルバに付き添った。彼らはトルヒーヨの恩人である親戚にとりなしを頼み、ようやく釈放されたが、それ以来、家の周りには見張りがつき、自宅軟禁同然の状態となった。

父はあからさまな反政府運動には加わらず、選挙が来ると一家の誰かが家族の身分証明書を集めて役場にもっていき、スタンプを押してもらってきた。それが投票済みの印だった。しかしどの家にもみられたようにトルヒーヨのポスターを壁に飾ることも、御用政党のドミニカ党に入党することもしなかった。それが災いして、2年後、父がまた連行され、翌日帰されたが、入れ替わりにミネルバが首都に連れて行かれ、トルヒーヨの兄から彼に会うように説得される。彼女はそれを強要されるくらいならホテルの3階の窓から飛び降りる、といって拒絶した。その後しばらくトルヒーヨはスペインへ行っていたので、圧力は収まった。



しかしすでにこの頃には、訪問客が絶えなかった家に寄りつくものはなくなり、店は客足が途絶えて閉店に追い込まれた。その心労から父は脳溢血の発作を起こすようになった。ようやく腹を決めた父はミネルバの大学進学を許し、彼女は1952年、25才で大学入学を果たす。だが翌年、大学は彼女の進級手続きを拒んだ。スペインから帰国したトルヒーヨの指示によるものであった。復学の条件はトルヒーヨへの賛辞を述べることであった。彼女は人に頼んで書いてもらった文章を読み上げてようやく進級が許される。父の死の直前のことで、彼はこのことを知らされないまま世を去った。

この頃9才年下の妹マリア・テレサも大学に入り、首都でミネルバと一緒に暮らしはじめた。しかし二人にはいつも尾行がつき、マリア・テレサはミス・ユニバースの候補となったが、無理やり降ろされてしまう。彼女は幼馴染の恋人レアンドロとともにアメリカに留学しようとしたが、パスポートを発行してもらえず、諦めざるを得なかった。彼女がミネルバと同じように反トルヒーヨに傾いていくのは自然の成り行きであった。

ミネルバは29才の時、マノロ・タバレスと結婚した。落ち着いた話しぶりの明るい好青年でミネルバと同じように法律の勉強をしていた。母も一目見た時から気に入るが、何よりも娘が過激な反トルヒーヨ主義者を夫に選ばなかったことに安堵した。マノロはミネルバを知る以前から反ト

ルヒーヨのグループ「民主青年」に入っていたが、さほど熱心な活動家ではなかった。だがミネルバに影響されてその後反政府思想に傾倒して行き、母の見込みは大いにはずれた。二人はマノロの実家のある、最北西の町モンテクリスティに住み、ミネルバは海岸地方での生活を楽しむ。まだ在学中だったので、飛行機で首都まで行き、親戚の家に泊まって大学に通い、反政府活動にも以前にも増して熱心に打ち込み、仲間の間では『蝶』という名で呼ばれていた。キューバのカストロ派の亡命者が流す放送を聞いて、警察に密告されたこともある。

ミネルバに続いてマリア・テレサも結婚したが、相手のレアンドロはマノロとは「民主青年」の仲間だった。だからミネルバとマノロ、マリア・テレサとレアンドロの二組の夫婦は家族の結びつきばかりでなく政治活動でも固く結ばれた同志となった。ミネルバは二人、マリア・テレサは一人の子供をもうける。しかしトルヒーヨは絶対にミネルバから目を離さない。1957年、彼女が法学部を卒業する時、優秀な成績であったにも関わらず、大学はそれを無視したばかりか、弁護士として開業することも許可されなかった。30年後、名誉回復されたミネルバに改めて最優秀賞が授与され、サント・ドミンゴ大学法学部にはミネルバ・ミラバルの名が冠された。

1959年からトルヒーヨが倒れる61年までが反トルヒーヨ運動の最も盛んな時で、その活動は幅広い階層の参加により多様化し、政府側の弾圧も熾烈を極める。何よりも反トルヒーヨ運動に力を与えたのは1958年のキューバ革命の成功であった。その翌年の1959年6月14日、キューバで訓練を受けた亡命ドミニカ人が北部の海岸地帯数カ所に上陸して革命を起こそうとしたが、海陸から迎え撃ちにあって壊滅する。しかし多くの若者を奮い立たせ、反逆の種を撒いたという意味でこの事件がドミニカ人に与えたインパクトは大きく、

反政府運動は教会や学生など幅広い層の間に広がりを見せた。マノロとミネルバが中心になって結成した「6月14日運動」と名付けられたグループもその一つだった。

1960年初め、その最初の集会が、母と長女パトリアとその夫ペドリートが住むコヌコの家で密に行われた。4年ごとの自由選挙、農地改革、議会による憲法の制定を目標とし、武器の入手などが決められた。会を主導したのはミネルバで、一番過激な意見を述べるのも彼女だった。ミネルバはトルヒーヨを拒絶したばかりでなく、政治的に昂然と挑戦し、反対派を組織し、そのリーダーとなったのだ。30年に及ぶ彼の独裁体制の中で初めてのことであった。しかし、そのような集会が見逃されるはずもなく、その後数日の間に全国で200人のメンバーが逮捕された。ミネルバとマノロ、マリア・テレサとレアンドロも逮捕され、集会に自宅を提供したペドリートはそれを聞いて自首した。警察はパトリアの家や母の農園を接收して家具や家畜を競売にかけたり、家を事務所に使ったり、あるいは壊したあと火をつけたりした。女性たちは間もなく釈放されたが、その後も逮捕と自宅軟禁が繰り返される。男たちは獄中で激しい拷問を受けた。それから名ばかりの裁判が開かれ、マノロやレアンドロたちは30年の刑と60万ペソの罰金、女性たちは3年の刑が宣告された。

もうこの頃にはトルヒーヨは、反政府の立場を鮮明にした教会とも袂を分ち、多くの神父が暗殺されたり、スペインへ送還されたりした。6月、トルヒーヨが、ベネズエラに民主政治をもたらしたベタンクール大統領を暗殺しようとしたことが発覚すると、それまでずっと独裁者を擁護しつつ利用してきたアメリカもいよいよ彼を見限って反対派と接触し始める。そして8月にはOEA

(OAS) がドミニカ制裁を決議すると、アメリカも大使館を引き上げ、トルヒーヨはいよいよ国際的に孤立した。

OEAは制裁を決議する前にドミニカに視察団を派遣して実情を調査しようとしたので、それを機にそれまで監獄に入れられていたミネルバとマリア・テレサは釈放されて自宅軟禁となる。しかしそれはミネルバを暗殺する計画の始まりだった。10月、二人の夫、マノロとレアンドロがサルセドの監獄に移された。パトリアの夫のペドリートはそのまま首都の監獄に留め置かれた。母の家に軟禁されているミネルバとマリア・テレサは夫を訪問する時だけ外出が許される。11月8日、二人の夫は更に北のプエルト・プラタへ移された。勘が良い母親は、それは姉妹を殺すための罠にちがいないからと、訪問を止めさせようとした。しかしミネルバは、狙われているのは自分だけで、一緒にいる者まで殺されるはずがない、国際的な圧力がかかっている今はなおさらのこと、と言って意に介さない。実際、それまでの何度かの訪問では何事も起こらなかった。

1960年11月25日のその日、ミネルバ、マリア・テレサ、パトリアが知り合いの運転手の車でプエルト・プラタへ面会に行った。パトリアは夫を首都の監獄に訪問したばかりだったが、姉として妹たちを守りたいと付き添ったのだ。惨劇はその帰途起こった。秘密警察の車があとをつけてきて、砂糖きび畑で4人を殺し、事故にみせかけるために車ごと崖から突き落としたのだ。母親や家族たちは無理やり、あれは事故だったと言われ、それは国内外に大きく報道された。

翌1961年5月、遂にトルヒーヨが暗殺された。だが予期されていたような革命は起こらず、反対に革命を起こすはずだった軍人が次々と消されてゆき、数カ月の間トルヒーヨ一族による血なまぐさい復讐が続いた。OEAの視察団が刑務所を訪問して政府に圧力をかけ、マノロたちはようやく7月になって釈放された。そしてついにその年の終わりには海外からの圧力に屈したトルヒーヨ一族は国外に亡命し、国民はようやく解放された。



1962 年末、32 年ぶりの民主選挙が行われ、革新派のフアン・ボッシュが大統領に選出されるが、トルヒーヨの残党とアメリカの策略によるクーデターで、7 か月後には倒されてしまう。マノロは友人が警察に殺されたあと、危険を感じて身を隠した。キューバで訓練をうけた仲間はカストロの成功に酔い痴れ、山に入ってゲリラ活動をすべしと主張し、穏健派はそれに反対して非武装で合法的に戦うべしとして、意見が割れた。弁護士だったマノロは後者に組みし、一時はレアンドロのようにメキシコに亡命することも考えたが、仲間を見捨てることができず、義務感からゲリラに加わる。しかし武器もほとんどなく、一週間で捕られ、仲間とともにその場で銃殺されてしまった。ミネルバよりも年下で、まだ 33 才だった彼は生涯のほとんどをトルヒーヨのもとで過ごしたのだ。

これまで政治活動には関わってこなかった次女のデデは姉妹のなかでただひとり生き残ったこと

を天命と考えて、母親とともに、遺児 6 人と自分の子供 3 人を懸命に育てた。しかしその道は決して平坦ではなかった。ミラバル姉妹が暗殺された当時、トルヒーヨの傀儡として大統領の座にあったバラゲールが 1966 年の選挙でフアン・ボッシュを破って大統領の座につくと、最初の 12 年間（1966—1978）の間にミラバル家は、武器を探すためと称して、28 回も軍や警察の家宅捜査を受け、デデの夫は苦勞して手に入れた農園を政府に接収された。姉妹の暗殺に直接手を下したのたちは裁判にかけられたが、短期間で釈放されて、アメリカに出国した。だが子供たちはそれぞれ立派な職業人として成長し、ミネルバとマノロの娘のミノウは外務次官を、デデの息子ハイメは副大統領や大臣を経験している。

1998 年、国連はミラバル姉妹が暗殺された 11 月 25 日を、女性に対する暴力をなくす記念日に制定した。

（いとう しげこ）

【ラテンアメリカ図書案内】

『ラテンアメリカ・オセアニア 世界政治叢書 6』

菊池 努・畑 恵子編著 ミネルヴァ書房 2012 年 4 月 279 頁 3,500 円＋税

これまで国家主権を前提にしてきた政治学が、21 世紀に入って世界の政治潮流の変化により政治経済・対外関係がどう変わり、今後どうなるかを展望するシリーズのラテンアメリカ編。グローバル化の進展と地域主義の進展で、ラテンアメリカがどう変化しつつあるかを理解するのを助けてくれる解説書。

グローバル化の進展と地域化の推進による「周縁化」からの脱却を論じた序章から始まり、第 1 章ラテンアメリカの「民主化・市場経済化と新しい地域主義」（畑恵子）では、グローバリズム、汎米主義と地域主義、政治体制の変遷、民主化の進展と 1980 年代の経済危機、民主主義の発展と新自由主義、市場経済化、新たな地域主義とその課題を、第 2 章「ラテンアメリカの地域主義」（堀坂浩太郎）では地域の概念に続いて第 2 次世界大戦後の流れの古い地域主義と、経済の国際化、域内外の市場統合の動きをとまなう新しい地域主義を論じている。第 3 章「中米・カリブの地域主義」（松本八重子）では、その歴史的变化と発展、米国や国際政治との関係を、第 4 章「安全保障問題と米州地域関係」（浦部浩之）では、米州安全保障秩序の歴史と東西冷戦後の転換、暴力・麻薬・テロに対する脆弱な民主主義、米国から離れての新たな枠組みの動きを、第 5 章「グローバリズムと反グローバリズム」（新木秀和）では、反グローバリズム運動の登場と新たな展開をサパティスタ運動やチャベスのボリーバル革命等を例に、その特徴と課題を論じている。

〔桜井 敏浩〕